

世界最初のトンボ保護区づくり

(社)トンボと自然を考える会 常務理事 杉村 光俊

中村市トンボ自然公園の概要

清流四万十川のほとり、高知県西南部・中村市に世界初のトンボ保護区がある。舞台となっている田無池田谷は総面積約50ha、東向きに開けた細長い谷地。大半はスギやヒノキの植林を主体とする山林で、内10haほどが稲作用農耕地となっている。中村市トンボ自然公園（以下トンボ公園）の主要施設は、主として社団法人・トンボと自然を考える会（以下、「考える会」）のナショナルトラストによる買い取りか借用のいずれかで確保した休耕田を整備したトンボ誘致池である。

2000年5月末現在での公園エリアは約4ha、内3haがトンボ誘致池、他の部分に駐車場や多目的広場、トンボを展示の中心に据えた自然史博物館「四万十とんぼ自然館」等を設置している。

エリアは一塊ではなく、約10haの農耕エリア全体に分散して確保しており、谷入り口の約2haに池沼性トンボの誘致池を、中央部には約0.15haの湿地性トンボ誘致池を、谷奥の約0.4haは棚田をそのまま生かした日陰を好むトンボの生息環境としている（写真1）。

四万十とんぼ自然館では、「身近な自然を楽しむために知っておくと役立つ情報を提供する」ことを第一に、世界のトンボ標本（約1,000種3,000点）やトンボ以外の昆虫標本、生態写真パネル、ビデオ映写、四万十川水系の魚を始めとする水生生物の飼育展示等を行っている（写真2、3）。

また保護区内での動植物の採集は原則禁止だが、「子供時代の原体験こそがその後の環境保全活動の行動力になる」との考えから、多目的広場の一部に子供達が自由に網を振れる浅いトンボ池も整備している。



写真1 谷入り口付近の誘致池



写真2 四万十とんぼ自然館



写真3 四万十のトンボ展示コーナー

トンボ保護区づくりの契機

小学2年生の頃にトンボに興味を覚えた私は高校3年の時、中村市内のベッコウトンボ生息地を公共事業により失ったことを契機にトンボ保護をライフワークにする事を決意した。ベッコウトンボは環境庁のレッドデータブックの絶滅危惧IA類にランク、さらに国内希少野生動植物種として全国的に保護策が講じられているトンボである（写真4）。

1976年、本種の高知県内唯一となった生息地がまたも公共事業によって消滅する運命であることを知り、移殖研究を思い立った。県内数ヶ所の池沼、休耕田等に卵や幼虫、あるいは未成熟成虫を放ち、最も好結果を得たのが、現在トンボ公園を整備している田黒池田谷の休耕田であった。トンボは一般に羽化後の一時期水辺から離れて生活する習性を持つ。幼虫時代を過ごした水辺が草原化や汚染などで生殖活動に適さない環境になっていれば、そのまま元の水辺に戻ってくることはない。

1980年4月下旬、池田谷で放した約10頭の若い成虫のうち、5月上旬になって2~3頭の雄が水辺で縄張り活動を行うようになったばかりでなく、翌1981年には明らかにこの地で育ったと考えられる1頭の若い♀を確認できるに至った。

しかし、この休耕田の上流では農耕が営まれており、流れ込む肥料分などで急速に湿地遷移が進み、そのままでは移殖研究が続けられなくなってしまった。研究継続には、自身の意思で自由に管理できる用地としなければならず、この段階でナショナルトラストを実施する決心を固めた。1983年のことである。私製絵ハガキを作製したり、著書の印税を充てるなどの資金集めを行う一方、個人名ではなく、団体名での用地購入が果たせるよう多くの人々の支援を得て



写真4 ベッコウトンボの若い雄

法人組織の設立にも取り組んだ。これが現在の「考える会」である。

法人組織ができ、564m²の用地取得を達成したのは1986年1月のことであった。

トンボ公園建設の歴史

池田谷一帯はいわゆる湿田地帯であり、1980年までに公園入り口付近の約2haが既に休耕田となっていた。当時、休耕田は放置時期の違いによって、水深や植生など多様な湿地環境となっており、ここで40種ほどのトンボがよく繁殖していた。しかし1983年頃にはその大半が草原化によって乾燥、一時的に増殖していたトンボ類も減少し始めていた。こうした休耕田をもう一度、ベッコウトンボの増殖研究も可能なトンボ達の楽園に戻したいというトンボ王国建設計画は、1985年6月、WWF・ジャパンによる525m²の保護区用地買い取りによって劇的に始まった。その後は主として同年12月に県知事によって認可された「考える会」のナショナルトラストにより用地の拡張と整備、管理がなされてきた。整備はほとんど人手によるもので、過剰繁茂した植物を除去して水を引き込み、誘致を図るトンボに合わせた植物を便宜配植するもので、種

世界最初のトンボ保護区づくり

(社)トンボと自然を考える会 常務理事 杉村 光俊



写真5 整備前の休耕田



写真7 完成した第1号トンボ池



写真6 初めての整備作業 1986.3.2



写真8 散策道の整備

の多様性を維持するためにはその後のメンテナンス作業が重要になる(写真5~7)。当初は専ら買い取りによる用地拡張を計画していたが、中村市での取り組みが刺激となり全国各地で同様の事業が始まったこともあり、ほどなく資金繰りが鈍化した。ただ、草原化によって減少一途のトンボ類救出にはさらに広いエリアの確保と整備が急務であったことから、当面は借用による用地確保で対処することになった。

こうした取り組みは「地域づくり」としても反響を呼び、1988年には中村市によって散策道の整備が実施されるなど(写真8)、公園と呼ば

れるにふさわしい施設となった。続いて1990年には、「身近な自然を楽しむために役立つ情報の提供」と「公園建設資金づくり」を主目的に、「考える会」が提案していたトンボ博物館が「中村市立四万十とんぼ自然館」としてオープン、高知県の新名所としての地位も固めた。この時点でトンボ公園エリアは約3haとなり、記録種も70種近くに達していた。現在の公園エリアはWWF・ジャパン及び中村市所有地(内トンボ自然館用地の一部は「考える会」が寄贈)を加え、買い取り地約1.5ha、借用地約2.5ha、計約4haとなり、記録種も74種(同規模面積で



写真9 高知県版レッドリスト絶滅危惧1B類のセスジイトンボ



写真11 高知県版レッドリスト絶滅危惧種のマイコアカネ



写真10 高知県版レッドリスト絶滅危惧1B類のトラフトンボ

の種類密度全国一)に増加している。

この間、四万十川流域においても里山環境は確実に荒廃しており、今年3月に公表された高知県版レッドリスト掲載種もトンボ種を中心に50種余りが生息する、県内一級の野生生物生息地ともなってしまった(写真9～12)。

今後の展望と課題

建設当初よりトンボ公園を単にトンボ類の保護区として留めず、人々の環境学習の場として活用することもトンボ保護以上の目的として考えてきた。2002年の総合学習導入を控え、その



写真12 高知県版レッドリスト絶滅危惧1A類のヒメコウホネの花に止まる同準絶滅危惧種のタバサナエ

考えは特に「子供達のために」との思いがより鮮明になってきている。

世界最初のトンボ保護区づくり

(社)トンボと自然を考える会 常務理事 杉村 光俊

地球規模での環境破壊改善のため生態系についての科学的知識を普及させることはもちろん、時期や時間など相手の都合に合わせて関わらなければならない生物観察、便利な情報化社会が人々に受動的生活を余儀なくさせかねない現代社会において、能動的に関わらなければ何も気付かせてくれない身近な自然などなど、トンボ公園には情操面での効用も少なくないと思われる。

既に高知県が計画するフィールドミュージアム構想の中でもトンボ公園は重要施設として捉えられており、ボランティアスタッフによるオリジナル自然観察プログラムも次々と考案されている。また昨年からは地元の小中学校を対象とするトンボ公園での体験学習も急増している(写真13、14)。

またとんぼ自然館に加え、中村市により、四万十川水系を中心とする水生生物飼育学習館(仮称・学遊館)も2002年オープンを目指し建設準備が進行しているなど、トンボ公園を舞台とする環境学習遂行に対しより一層のグレードアップが期待されている。

一方、トンボ公園が人々にとって魅力的な施設との認識が高まるにつれ周辺部での宅地開発が急進、特に池田谷入口付近の山林はすっかり住宅地と化してしまっている。このため保護区内で育った多くの昆虫が夜間民家の明かりに誘引される被害が顕著となり、また谷内の保湿機能も低下するなど生態系の崩壊も着実に進行している。

このため「考える会」ではトンボ公園入り口の山林(緑地)再生を期し、一口一万円とする寄附金「一口オーナー制度」を設け賛同者を広く募っている。不況下でもあり、見通しは必ずしも明るくない。しかしこれが果たせない限り、



写真13 地元の小学生を対象としたフナ釣り体験

写真14 市民ボランティアによる整備作業
(スイレンの間引き)

自然保護区としてのトンボ公園成就是事実上不可能となってしまう。

道のりはまだまだ遠いが、今回の受賞を励みに名実とも世界に誇れる「トンボ王国」を一日も早く完成させたいものである。